

序章

1 本研究の目的

本研究は、中日国交断絶期の日本語習得者、とりわけ彼らがだれにどこで日本語を習得し、さらに後の人生では日本語とどのようにかかわっていたのかという人物史研究を軸として、現代中国における日本語教育の歴史的基盤を明らかにすることを目的とするものである。

いま、中国の日本語教育は学習者の数においても、教師の数やレベルにおいても世界一と言われており、その規模は英語教育に次いで第二位となっている。このような規模に発展するにはどのような歴史的基盤があったのであろうか。こうしたことに思いを巡らせる時、ある歴史的映像が思い浮かぶ。1972年日中復交の会談である。交渉の場には流暢な日本語を話す中国人通訳がいた。彼らは日本人と変わることない日本語を話し多くの人を驚かせた。周知の通り、建国当初の新中国は「ソ連一辺倒」で、ロシア語教育に力を入れていた。一方、国交がない日本のことばは軽視され、日本語が話せるだけで売国奴と見なされ冷遇される時代でもあった。いったい通訳たちはどこでだれに日本語を教わりマスターしたのであろうか。こうした素朴な疑問が本研究の着想の原点にある。

日本語ができる人が国交回復と同時に突如現れたわけではもちろんない。国交断絶期においても、いつか中日の関係が回復する日を信じ、日の当たらない場所で地道に日本語を教え、あるいは日本語を学ぶ人たちがいたのである。これら日本語習得者の人生は、日本語を学んでいたことで、とりわけ文化大革命という特殊な歴史的環境のもと大きく揺さぶられたはずである。彼らがどのように生き、何を感じ、さらに将来の中日関係をどのように見据えていたのかを、代表的事例を通じて考察する必要がある。彼らの人生は、いわば「秘められた中日交流史の1コマ」である。彼らはまた、今日の日本語教育の基礎を作り上げた。彼らの人生をたどると、戦争と断絶が長かった中日関係の特殊性とともに、両国の交流を広げた日本語教育の流転の歴史が見えてくる。中日友好の基礎の一つである言葉の教育を行った彼らの研究は重要な意義を有している。

このように、本研究のテーマは現代中日関係史研究や中国の日本語教育史研究においてカギとなるにもかかわらず、先行研究を調べてみると残念ながら直接扱ったものはない。

このような巨大かつ未開拓の研究課題に挑戦するにあたり、明らかにされなければならない課題として、筆者はまず中日国交回復前の日本語教育機関の全体状況の把握、次に日本語教師たちに的を絞って研究を行った。具体的には、以下の6点についてそれぞれ論文を著した。

- ①建国初期の3つの日本語高等教育機関。
- ②文化大革命前夜の大連日語専科学校。
- ③戦前の日本に留学し日本語を習得した者—徐祖正。
- ④旧植民地で生まれ日本語を身に付けた者—陳信徳。
- ⑤新中国にとどまった日本人居留民—岡崎兼吉。
- ⑥新中国を支援した日本共産党員—大連日語専科学校の日本人教師団。

このような点を解明することによって、留日帰国者や旧植民地台湾出身者という戦前の日本語習得者、日本人居留民、および新中国に派遣された日本共産党系日本語教師団が新

中国の日本語教育に果たした役割についての知見を持つことになろう。

そこで、文部科学省から科学研究費の補助を受け、中日国交回復前に設立された4つの日本語高等教育機関の全体概況を明らかにしたほか、資料的に有力な事例として、留日帰国者を北京大学日本語教師の徐祖正、旧植民地台湾出身者を北京大学日本語教師の陳信徳、日本人居留民を北京大学日本語教師の岡崎兼吉、大連日語専科学校の32名の日本人教師を取り上げ、研究を行うこととした。

今回まとめることができたのは、本テーマの氷山の一角に過ぎず、残された課題は山積しており、続けて研究する必要がある。

第 1 部

中日国交断絶期の日本語高等教育機関

第1章

建国初期の3つの日本語教育機関

はじめに

本章では、中華人民共和国の建国初期の3つの日本語教育機関、すなわち北京大学(1949年)、東北軍区新聞学校(1950年)、北京対外貿易専科学校(1953年)の日本語教育事情を明らかにすることを目的とする。具体的には、この3つの日本語教育機関の歴史的流れ、教育目的、カリキュラム、教師の氏名や経歴、教材、修学年数、学生数、入学経緯、卒業後の進路など全容を概観する。

第1節 北京大学の日本語教育機関

(1) 機関の名称について

北京大学の日本語教育機関は、1949年中華人民共和国の成立に伴い再出発した新中国最初の日本語教育機関であり、現在の名称は「北京大学外国語学院日本語言文化系(日語系と略称)」である。

同系が2006年、つまり北京大学日本語教育機関設置60周年という節目にこれまでの歩みを総括する「北京大学外国語学院日本語言文化系1946-2006」という冊子を出した。冊子は、これまで北京大学が出した校史関係資料の中で、日本語教育機関に関するもっとも詳細な資料である。

冊子によると、北京大学は1920年代からすでに日本語教育を行っていた。コースとして始めて設置したのは1946年で、正式な名称は「北京大学東方語言文学系日本語言文化専業」であった。後に「東方学系日本語言文化専業」と改めた。1999年に外国語学院の創設に伴い、「専業」(コース)から「系」(学科)へと昇格し、現在の「外国語学院日本語言文化系」となった。しかし、冊子には1949年建国当初の名称については同大学の『校史』と同様に明記されていない。

では、新中国の成立に伴い再出発した北京大学の日本語教育機関はどのような名称で、どのようなレベルのものであったのであろうか。この基本的なデータを確認するため、筆者は例年の大学入試案内に着目した。現段階で見つけた最初の案内書は、1952年に政府が出した『昇学指導』である。中には「全国高等学校1952年暑期招生系科分類表」があり、冒頭で「全国の高等教育機関は学部学科を調整中であり、学科およびコースの設置は未だ定まっておらず、現有の資料をもとにこの表を編集し、受験生の志願選択に供する。表中に列挙した学校と学科コースの分類は学部学科の調整過程で変動する可能性がある」と記されている¹⁾。

同表によると、北京大学日本語教育機関の名称は「日文専業」であり、他のアジア言語と並んでアジア言語学科に属していた。1953年の『昇学指導』では「東方語言学系」の「日本語専業」となり²⁾、また、1954年の『昇学指導』にも「東方語言学系日本語専業」と記されていた³⁾。1961年度まで同様であった⁴⁾。1962年度からは「東方語言文学系日本語言文化専業」と改め、1965年度まで続いた⁵⁾。

つまり、上述した冊子と『昇学指導』を合わせて考察すると、北京大学日本語機関の名称の流れは次のようである。

東方語言文学系日本語言文化専業(1946-?年度)……東方語言学系日本語専業(1952-1961年度)→東方語言文学系日本語言文化専業(1962-1965年度, 1966年から1976年まで文化大革命)……東方学系日本語言文化専業(?-1998年度)→外国語学院日本語言文化

系（1999-現在）

(2)教育の内的事項および学生の事情

教育の目的は「翻訳の幹部，教師および研究者を養成する，当面は主に翻訳の幹部を養成する」ことである⁶⁾。

履修科目について，1953年のカリキュラムでは主に中国史，アジア史，帝国主義時代国際関係史，基本東洋言語，中国語作文実習，言語学概論，日本概況などを学び⁷⁾，1955年にはマルクス・レーニン主義基礎，中国革命史，政治経済学，弁証唯物論与歴史唯物論，中国史，近代国際関係史，日本の歴史，日本の地理，日本文学史，言語学概論，現代中国語，文芸学概論，中国文学史，日本語，翻訳などを履修することとなっていた⁸⁾。

北京大学日本語コースの教員が編集した日本語教材は多数あった。教材の研究については別稿に譲るが，ここではこれまで見つけた教材12点を紹介しておく。

- ①北京大学東語系編『日本語二年級課本 1957-1958 第一学期・第二学期』北京大学東語系，1958年，ガリ版。
- ②北京大学東語系日本語專業編『日語常用句型成語』北京大学東語系日本語專業，1958年，ガリ版。
- ③北京大学東語系日本語教研室編『“八大”一次會議文献詞彙訳法参考資料』北京大学東語系日語教研室，1958年，ガリ版。
- ④陳信徳編著『現代日本語実用語法』（上・下冊）時代出版社，1958-59年。
- ⑤北京大学編『大学一年級日語課本』（北京）商務印書館，1959年。
- ⑥陳信徳編著『科技日語自修読本』（北京）商務印書館，1960年。
- ⑦北京大学日語教研室編『日語』第一冊，（北京）商務印書館，1963年。
- ⑧北京大学東方語言系主編『日語』第一冊試教本，北京外国語学校，1964年。
- ⑨北京大学日語教研室編『日語』第二冊，（北京）商務印書館，1964年。
- ⑩北京大学日語教研室編『日語』第三冊，（北京）商務印書館，1964年。
- ⑪陳信徳編著『新編科技日語自修読本』（北京）商務印書館，1964年。
- ⑫陳信徳編注『訳注科技日語自修読本』（北京）商務印書館，1964年。

①⑦⑨⑩は日本語コースの学生用教科書で，①はもっとも古く未出版物である。⑤は一般教養用の教科書で，新中国で出版した最初の日本語教科書である。筆者のインタビューに応じてくれた李宗恵の証言によると⁹⁾，この本は教員魏敷訓と1954年に入学して1958年に卒業した李宗恵と，1955年に入学して1959年に卒業した徐昌華の3人が編修したものである。②③は日本語コースの学生用参考書で，④⑥⑪⑫は当時の日本語コースの若手教員の中心人物であった陳信徳の編著書で，⑧は北京外国語学校のために編集した教科書である。

また，李宗恵の回想によると，上列の教材が出る前の1957年に日本人教師岡崎兼吉氏は私費を投じて日本から20冊『明解国語辞典』（改訂版，昭和32年）を購入し，李らクラス全員に一冊ずつ贈呈した。李ら学生にとってこれは最初の日本語の教材である。李は今もこの辞書を大事にしている。

学生の修業年数について、1956年度までは4年制であった。1958年度からは5年制に変更した。また、1955年度と1956年度の入学生は入学時は4年制であったが、途中5年制に変更された¹⁰⁾。

入学生数については年々変動があり、1949年度は7名で、1950年度は1名のみであった。1951年度は春と秋の2期に募集し、春期は13名、秋期は22名であった。1952年度は24名、1953年度は19名、1954年度は20名、1955年度は35名、1956年度は27名であった。1957年度はどのような事情からか学生を募集しなかった。1958年度は12名、1959年度は11名、1960年度は21名、1961年度は15名であった。1962年度はまた学生を募集しなかった。1963年度は15名、1964年度は33名、1965年度は14名であった。以降文化大革命で学生の募集が停止され、再び募集が始めたのは1970年度であった。また、1955年度に入学した顧海根の証言によると、1955年度の学生数は多くて2つのクラスに編成された。

入学経緯については、基本的に個人の志願より国の選抜が主流であった。

卒業後の進路も個人の志望ではなく国が決める、いわゆる「統一分配」であった。また、1960年卒の陳生保や顧海根ら3人は同大学大学院に進学し、中国初の日本語専攻大学院生となった。4年後の1964年に陳生保と顧海根が課程を修了したが、1名は中退した。

(3) 教師

1954年4月に同日本語コースの助手になった孫宗光の回顧によると、建国初期、即ち1954年までの教師陣は9名で、日本人教師今西春秋と岡崎兼吉のほか、徐祖正、魏敷訓、陳信徳、劉振瀛、黄啓助、孫興凡、張京先がいた。以下、これら9名教員について紹介しておく¹¹⁾。

今西春秋、日本人教師。京都大学文学部卒、専攻は東洋史である。満蒙史を研究するため、終戦後も北京に留まった。北京大学で日本語の教授をしながら満蒙史の研究を続けていたが、1951年にスパイ容疑で逮捕された。3年余りにわたる獄囚生活の後、1954年釈放されて帰国し、天理大学満蒙研究所に迎えられた¹²⁾。

徐祖正、教授。江蘇省に生まれ、東京高等師範学校で英文学を専攻した。帰国後、北京女子師範大学や北京師範大学の教授となり、英文学を教えながら日本文学講座をも兼任した。1930年代は北京大学の教授となり、建国後は一時的に中国人民解放軍に属する外国語教育機関の教員となったが、1952年頃北京大学の教授に戻った¹³⁾。

魏敷訓、副教授。山東省に生まれ、1930年代後半の北京大学日本語コースを卒業して京都大学へ留学し、修士課程を修了した。建国後は北京大学の教師となった¹⁴⁾。元代の詩歌である元曲の研究で知られる。担当科目は3、4年生の「日訳中」（日本語を中国語に訳す）と「文語語法」である。文革期間に退職し、四川省の娘の家で晩年を過ごした。

陳信徳（1905-1970年）、講師。台湾で生まれ、同志社中学、旧制第三高等学校を経て京都大学文学部に進学した。専攻は中国文学で、卒業後は大学院生として残り、文学部助手となった。在学中に倉石武四郎の指導を受け、また、傅芸子のもとに毎週中国語（北京語）の個人教授を受けに通った。1937年に平林美鶴と結婚し、6月に北京に留学した。日中戦争で大学生活を中断され、1938年から終戦まで北京中央放送局に務めた。今西春秋の紹介で1950年9月から北京大学の教員となり、主に文法を教えた。文化大革命中に非

業の死を遂げた¹⁵⁾。新中国最初の日本語文法書『現代日本語実用語法』(上, 下冊, 時代出版社, 1958-1959年)の執筆者であり、『科技日語自修読本』(商務印書館, 1960年)など多数の作品を残した。

劉振瀛, 講師。遼寧省瀋陽生まれ。東京高等師範学校卒。帰国後は北京師範大学の教員となり、解放後は北京大学の教員となった。「語音」(発音), 「汎読」, 「日本文学史」を担当した。単著『日語中謂語的附加成分与漢訳』(北京・商務印書館, 1984年)など数点がある。

黄啓助(1922,1,10-2002,11,26), 講師。神戸で生まれた華僑で、関西学院大学で経済学を学んだ。建国後は華北革命大学を経て北京大学の教員となった。1958年に北京中医学院に転勤し、当校の日本語教材を編集した¹⁶⁾。夫人は日本人の李智美(1923,11,13-2004,9,20)で、後に同コースの教員となった。

孫興凡, 講師。遼寧省瀋陽市で生まれ、南満中学堂を卒業後に日本へ留学した。1, 2年生の「精読」, 「公外日語」(一般教養の日本語)を担当した。1953年に北京にある商務印書館に転任し、後に対外貿易学院の日本語教師となった。

張京先, 劉振瀛と同年の生まれ。講師。奈良女子高等師範学校卒。日本人の母を持ち、夫陳涛は北京対外貿易学院で日本語を教えていた。解放後、夫の関係で一時的に北京対外貿易学院で一般教養の日本語を教えていたが、まもなく北京大学の教員となり、1, 2年生の授業を担当した。

岡崎兼吉(1909,9,5-1999,8,31), 日本人教師。1929-1932年に早稲田大学文学部で学んだ。1942年から満州映画協会に務めた。戦後は炭鉱や病院や鉄道の日本人小・中学校で教鞭をとった。1953年5月に鉄道部や全国総工会の推薦で北京大学の外国人教師となった。文化大革命中の1969年12月に帰国させられたが、1973年4月に北京大学の要請で再び同校で教鞭をとり、1983年まで務めた。北京で病死した¹⁷⁾。

以上が建国初期北京大学日本語コースの教師の状況である。その後の1956年には鈴木重歳と児玉綾子夫妻、文化大革命後は李智美が日本人教師として招聘された。また、1955年から1966年まで翁祖雄ら多くの教員を採用した。特に卒業生からの採用が多かった。1951年に入学した彭家声や張光佩や卞立強、1952年に入学した鄭敬堂や陳耐軒、1954年に入学した徐昌華や李宗恵、1955年に入学した顧海根や李孫華や龐春蘭や崔榮林、1956年に入学した潘金生や史美芳はそれである。

第2節 東北軍区新聞学校の日本語教育機関

(1) 歴史的流れと教育の内的事項

東北軍区新聞学校は中国人民解放軍が1950年に瀋陽で設置した教育機関であった。設置の意図は不明であるが、戦後旧満州に残留していた日本人や日本兵捕虜の管理が円滑に行われるようにという発想からかもしれない。この東北軍区新聞学校は北京大学と並んで建国当初の2つの日本語教育機関の1つであり、現在中国の日本語教育の名門校である中国人民解放軍外国語学院の前身である¹⁸⁾。

1951年6月、東北軍区新聞学校は北京へ移った。北京にある労働大学と合併し、労働大学外文訓練班となった。まもなく軍委工程学校と名乗り、最後に総参謀部第三部幹部学校(別名、軍委技術部幹部学校)という名称に定着した。その後、1957年には北京から

張家口へ、1962年には張家口から宝鶏へ、1978年には宝鶏から洛陽へ移転した。現在の学校名である中国人民解放軍外国語学院は1986年から使用されているもので、この間には解放軍総参外語専科学校（1957年）、解放軍外国語文学院（1960年）、解放軍張家口外国語文学院（1961年）、解放軍外国語学院（1962年）、解放軍技術工程学院（1964年）、解放軍第一外国語学校（1969年）、解放軍工程技術学院（1975年）、解放軍洛陽外国語学院（1978年）と9回もの改名があった。

教育目的、カリキュラム、学生の修学年数、定員、教師、教材、入学経緯、卒業後の進路など内的事項については、未だに公表されていないが、1950年に入学した1期生Y氏へのインタビューから公開できる情報を以下に記す。

教育の目的については、軍の必要性があるからということである。詳細は語られなかった。カリキュラムについては、これから聞き取り調査を纏めていきたい。

学制について、最初の3期生、すなわち1950年、1951年、1952年に募集した学生は2年制であった。そのうち、1期生は1950年12月に入学して1951年6月に卒業したので、実際には1年半の在学期間であった。1期生は東北から選抜した若い兵士で、1951年に入学した2期生は華東の兵士から募集した。1952年に募集した3期生の選抜地区は不明である。この3期の学生は通称労働大学の学生である。1953年、1954年、1955年の3年間は学生を募集しなかった。1956年からは4年制となった。その後の1959-1961年、1963-1965年、計7期の4年制学生を募集した。1966年、文化大革命が始まり、学生募集は全面的に中断された。

学生数については、1950年の1期生は全員で36名であった。以降については調査中である。

設立当初の教師は3名。「主講教師」（上校、教授に相当）1名と「輔導教師」（助教に相当）2名がいた。「主講教師」は汪大捷で、「輔導教師」は孫丹誠と趙福泉であった。汪大捷は東京高等師範学校や東京帝国大学に留学したことがある¹⁹。孫丹誠と趙福泉も日本留学の経歴があるが、留学先は不明である。また、孫丹誠は汪大捷の後の夫人である。

今回、Y氏の紹介で4年制の1期生、すなわち1956年に入学し、1960年に卒業したL氏に出逢った。L氏の回想によると、在学期間中の日本語教師には軍人が2名、非軍人が10数名いたようである。軍人教師は劉茂九大尉と王恒栄大尉である²⁰。非軍人教師は楊春臣教授（台湾籍華僑、日本人夫人、1950年代初頭帰国、日本で報道に従事したことがある）、劉子連教授（台湾籍華僑、日本人夫人）、陳書玉教員（L氏の指導教師、日本某商業学校卒業、二年生の基礎日本語を担当）、趙福泉教員（東北生まれ、留日学生、一年生の基礎日本語を担当）、王日和（女、留日学生）、孫丹誠（女、南方人、留日学生）、張厚聡（1956年に外貿学院へ転勤）、汪大捷（1956年に外貿学院へ転勤）、鄭料（台湾籍華僑、日本人夫人）、李漢波（東北人、日本人夫人、三年生の泛読を担当）、黄連清（台湾籍華僑、三・四年生の精読を担当、中国語はあまり上手ではない）、周祥侖（1957年に北京大学卒）などである。1956年の教師の数は設立当初よりはるかに増えたことがわかる。

使った教科書について、Y氏の時は瀋陽民主新聞社が残留日本人子弟のために出版した小・中学校用の教科書で、また同出版社が出版した『民主新聞報』や雑誌が補助教材として使用された。

(2) 一期生 Y 氏へのインタビュー

Y 氏は、1936 年 1 月 16 日に吉林市に生まれ、原籍は山東省煙台市である。東北解放後の 1949-50 年の 2 年間、速成教育機関で小学校 6 年間と中学校前 2 年間の計 8 年間の課程を履修した。いまから見れば不思議な教育であるが、人材が極めて不足している建国初期においては往々にしてあったことなのであろう。Y 氏の言葉を借りていけば、時代の特徴である。

1950 年 6 月に朝鮮戦争が勃発し、10 月に中国が参戦した。同年 12 月、14 歳の Y 氏は中学校 3 年目の課程を辞め、多くの若者と同様に満腔の熱血で中国人民志願軍に入隊した。あまりにも年少であったためか、結局、朝鮮戦場には送られず、上述した東北軍区新聞学校に入学させられた。日本語習得の始まりである。童年時代に日本兵や日本人にさんざんいじめられた記憶はまだ新しく、いきなり日本語を勉強しろという軍の命令にしばらく不服であったが、軍人である以上軍令に従うしかなかった。

在学中に古本屋から井上翠編『井上 支那語中辞典』、服部操『漢和大辞典』、八杉貞利『露和辞典』、王玉泉『日本口語文法』と『日本文語文法』、汪大捷『日語翻訳看眼点』など大量の参考書を購入し、日本語学習に没頭した。

Y 氏の卒業証書によれば、1950 年 12 月に入学し、1952 年 7 月に卒業したことになる。1 年半の在学期間ではあるが、国に大学 4 年間の学歴として認められた。

Y 氏は 1960 年に退役して西安にある西北工業大学の最初の日本語教師となった。最初に教えた相手は大学生ではなく、大学の教師たちであり、通称「教師班」であった。この「教師班」は 2 期があり、1 期生は 1960 年 9 月の 69 名、2 期生は 1964 年 9 月の 80 名であった。1 期生に使った教材は陳信徳編『科技日語自修読本』第 1 版（ピンクの表紙）で、2 期生に使った教材は自ら編集しガリ版で刷った教材の他、西安交通大学の日本語教師顧明耀が謄写版で印刷した教材と陳信徳編『科技日語自修読本』第 2 版増補版（藍色の表紙）も用いた。また陳信徳編著『現代日本語実用語法』も参考書として使用した。日本語を学びたい者は大学教師のみならず、社会人にもたくさんいた。Y 氏は社会の要請に応え、社会人クラスをも開き、寝食を削って無償で黙々と奉仕した。文化大革命前のことである。

文化大革命後、Y 氏は高等教育出版社外語編輯室の主任へ転任し、さらに国家教育委員会（教育部の前身、日本文部科学省に相当）大学外語指導委員会委員に抜擢され、全国大学における日本語教育の指導・普及に当たった。日本語の参考書が極めて乏しい時代において、Y 氏は参考書の訳注、修訂に力を入れた。とりわけ日本の先進的な技術を学びたいという社会の要請や科学技術者の熱意に応えるため、Y 氏は西北工業大学で学んだ工業系知識を活かして『科技日語自学文選』（商務印書館、1982 年）の自動制御部分の訳注、『科技日語自学文選』（商務印書館、1980 年）の冶金部分と『日語科普対照注訳読物 海洋』（商務印書館、1988 年）の修訂に力を注いだ。また、三浦哲朗「化粧」（『日語学習文選』第四集、商務印書館、1983 年）を訳し、日本文学の紹介にも尽力した。さらに中国辞書学会理事、双語詞典專業委員会常務理事などを歴任した辞書学者として、「日漢双語辞書の検索」（『双語詞典学研究』高等教育出版社、1994 年）、「20 世紀的中国日語類双語辞書」（『辞書研究』第 5 期、上海辞書出版社、2000 年）などの論文を記している。

第 3 節 北京対外貿易専科学校の日本語教育機関

(1)歴史的流れ, 教育目的, 修学年数, カリキュラム, 教材

北京對外貿易專科學校は1953年に成立, 現在の對外經濟貿易大學である。前身は1951年に成立した高級商業幹部學校であった。中國對外貿易部(日本の經濟産業省に相当)が直轄し, 國家の對外貿易人材を養成する高等教育機關であった。日本語学科は北京對外貿易專科學校の成立に伴い設けられた。「1953年組織機構図」によると, 日本語教育機關の中國語名称は「日文組」であった²¹⁾。また、『1953年暑期高等学校招生昇學指導』によると, その名称は「對外貿易應用外文(日本語)」であった。校内と校外で呼び名が違うことが分かる。

1954年3月, 「朝鮮文組, 越南文組, 日文組」が合併して「東方語文系」となった。同年9月, 北京對外貿易專科學校は北京對外貿易學院に改名し, 「東方語文系」も「東方語言系」と改め²²⁾, 日本語教育機關の名称は「東方語言系對外貿易日語翻譯專業」となった²³⁾。また, 「1955年組織機構図」には「東方語言系日語教研組」と記されていることもその証左となる²⁴⁾。

1964年11月, 中共中央・國務院(內閣府に相当)は「全國外語教育七年規劃綱要」を公布し, 外國語教育の強化に力を入れた。こうした影響によって, 当校は再び改組し, 「第一外語系」と「第二外語系」の2つ学科に纏めた。「日語組」は「第二外語系」に属した。また同年, 「對外貿易外語專科」(3年コース)を新たに設け, 英語・フランス語・日本語の3コースを設置し, 計399名の新入生を募集した²⁵⁾。しかし1966年に始まった文化大革命によって中断され, 1970年に閉校となった。再開したのは1973年であった²⁶⁾。

『1953年暑期高等学校招生昇學指導』によると, 本校の目的は「外國語かつ對外貿易知識を通曉する對外貿易の翻譯幹部や外國語秘書を養成する」ことであり, 履修科目については「新民主主義論, マルクス・レーニン主義基礎, 政治經濟学など政治理論科目, 1つの外國語のほか, 國際貿易原理与政策, 對外貿易組織与技術, 世界市場与行情, 農工業品出口与進口, 對外貿易統計, 國際結算与資金供应など専門科目も履修する」ことである²⁷⁾。

修学年数については, 1956年度までは3年制で, 1957年度からは5年制であった。

教材は手書きのものかガリ版で刷ったものなど未出版のものばかりである。この9月に卒業生にインタビューをする予定があり, 教材の入手を期待する。

(2)教師

教師は, 北京對外貿易專科學校が設立した1953年には陳濤と金鋒の二人であった。北京對外貿易學院が設立した1954年には, 新たに日本人教師藤田恵美が加わった。1956年, 上述した總參謀部第三部幹部學校(労働大學)から張厚聡と汪大捷が転任してきた。これら5名は文化大革命前の日本語教師である。以下, 1957年に入学して1962年に卒業した顧明耀氏と, 当時の日本人教師藤田恵美氏へのインタビューにより, 5名の教師について紹介しておこう²⁸⁾。

陳濤(1900-1990年), 男, 教授。湖北省で生まれ。慶應大學で經濟学を専攻し, 中國人留學生のリーダー的存在であった。1927年に周恩来や郭沫若らと共に南昌蜂起に参加し, 後に黃埔軍官學校の政治教員となった。建國前に共産黨のスパイとして國民黨に逮捕されたことがある。建國後は商業部外貿局長(經濟産業省貿易經濟協力局局長に相当)となり, 1951年に高級商業幹部學校校務委員會の委員を拝命し, 以降この學校のために尽

力した。文化大革命中に共産党から除籍されたが、文化大革命後に回復され、次官級として退官した。夫人は北京大学の日本語教師張京先である。代表的な論著は主編の『日漢辞典』（商務印書館、1959年）と『日漢大辞典』（商務印書館、1964年）がある。

金鋒，男，朝鮮族。建国前は丹東市長の通訳，建国後は貿易部（経済産業省に相当）の通訳を務めた。陳涛と同じく本校の最初の日本語教師である。代表的な論著は編『中日貿易会話』（北京商務印書館、1965年）がある。

藤田恵美（1928- ），女，日本人。横浜市で生まれ。1935年7歳の時に丹東市（当時、安東と呼ぶ）に渡り，現地の日本人小学校や奉天朝日高等女学校を経て，1945年に長春市（当時，新京特別市と呼ぶ）にある「満州国立女子師道大学」に進学した。終戦によって中退し，奉天に戻り，1946年に「日僑善後連絡協会」を手伝った。1947年から天津を経て北京へ赴いた。1954年に北京対外貿易学院の成立に伴い当校の日本人教師となった。26歳のことである。1974年帰国まで20年間，当校の日本語教育に尽力した。帰国後も日中友好の橋掛けとなり，日中学院を経て1975年に日商岩井に入社した。日中貿易における多くのプロジェクトに力を発揮した。定年退職後も会社を設置し，日中貿易の人材養成に尽くしている。現在81歳である。

張厚聡，男，張之洞の末裔。慶應大学卒で，陳涛と同窓である。夫人はロシア人で，北京師範大学のロシア語教師。

汪大捷（1906-2000年），男，遼寧省瀋陽市長灘鎮（旧名：遼中県）で生まれた。1923年に南満州鉄道株式会社が経営する瀋陽の南満中学に入学した。同年11月に地元の資産家蘇若泉の次女蘇敬和と結婚した。5年後の1927年，南満中学を卒業して日本へ留学し，鹿児島にある旧制第七高等学校に進学した。鹿児島弁の聞き取りが困難であったことなどの理由で一時帰国したが，翌1928年に東京へ渡り，1929年に遼寧省の奨学生として東京高等師範学校の英語科に入学した。1931年の9.18事変に怒りを感じ帰国し，北京師範大学教育系に編入した。1934年卒業までの間，1932年から京華美術学院などの学校で日本語を教え，生活費を稼いだ。また「午末日文研究社」を結成し，『表解日文語法講義』『日文翻訳着眼点』『新式日華大辞典』の3つの教材を編集した。中国新文化運動後の横書式に対応して，教材も横書で編集したことで名が知られていた。1936年に再び来日して東京帝国大学大学院へ留学し，日本史を専攻したが，1937年に帰国した。以降国民党西安行営参議官や第一俘虜收容所所長などを務めた。在任中に收容所を教育の現場として，日本人捕虜などを人道的に取り扱い，「大同学園」という別名で捕虜に中国文化や芸術，スポーツ，生活学習を通して教化することで謝氷瑩の『黄河』，香港『大美画報』，上海『大地画報』，地元『西安日報』などのメディアに注目された。戦後，旧満州を接收する軍事委員長東北行営主任熊式輝の通訳兼秘書官として瀋陽に赴き，東北に残る日本人の留用や管理に尽力した。元満州国重工業総裁で留用されていた高碓達之助との交友はこの時期である。新中国が成立した後，「2」で述べた中国人民解放軍の東北軍区新聞学校で日本語教師となり，1957年に退役して本校の日本語教師となり，退職まで務めた。その後も日本語教育など中日の橋掛けとなり，晩年は日本でも長く生活したことがあり，1989年に秋本能里子と一緒に埼玉県川口市で東洋アカデミー日本語学院を創立した。論著は上述した早期の教材3点の他，汪大捷・孫丹誠編『日語漢字詞弁異手冊』（北京・商務印書館，1965年）など多数がある。

(3) 学生

学生数については、北京対外貿易専科学校の時代、つまり 1953 年に入学した日本語専攻の学生数はまだ把握していない。北京対外貿易学院の時代については、インタビューに応じてくださった当時の日本人教師藤田恵美氏の回想によると、1 クラス当たりの生徒数はとても理想的で 20 名程度であった。また、藤田氏から頂いた史料『対外経済貿易大学対外貿易外語系校友録 1964-1968』の名簿を数えてみると、1 クラスはちょうど 20 名であった。

筆者のインタビューに応じてくださった顧明耀氏（在学期間は 1957-1962 年、インタビュー当時は愛知大学教授）の証言によると、自分が入学した年の新生は 10 名であった。うち、人民大学附属工農速成中学による推薦者は 2 名、自分を含む高考（全国統一大学入試）から選抜された学生は 8 名であった。当時、学生の志願より国の選抜が主流であったが、自分は日本語を志願していたのでちょうどよかったという。卒業後は自分を除く全員が各地の対外貿易部門に配属され、のちに中日貿易界さらにいえば中国経済界の大黒柱になった者が多いが、顧氏だけは西安交通大学の日本語教師となった。

おわりに

中華人民共和国の成立に伴い、高等教育機関の接收や再編が行われた。こうした再編の中、1952 年の 210 カ所であった高等教育機関は 1954 年度になると 188 カ所となった。そのうち、総合大学 14 カ所、工業系 40 カ所、師範系 37 カ所、医学系 28 カ所、農林系 28 カ所、財經系 5 カ所、政法系 4 カ所、外国語系 8 カ所、芸術系 14 カ所、体育系 6 カ所、少数民族系 3 カ所、気象系 1 カ所であった。しかし、日本語教育機関は北京大学の日本語コースと北京対外貿易専科学校の日本語コースの 2 つしかなかった。外国語系の 8 カ所はいずれもロシア語を主とする西洋言語を学ぶところである。

この 2 つの日本語普通高等教育機関の他、軍にも 1 カ所がある。本稿で取り上げた東北軍区新聞学校、現在の日本語教育の名門校である中国人民解放軍外国語学院である。かつて国防上完全に秘密にしていたが、いまは学生募集情報のみを公開している。公式なホームページもなく、この度筆者は同校を訪れ学内見学を申し込んだが許されなかった。校史などを含む過去の情報は一切公開していない状態である。

今回は 1950 年代中国における日本語教育機関の事情を把握するために、この 3 校について調査を行った。多くの壁にぶつかり、本研究が今日まで行われていない原因が多少なりとも理解できた。たとえば、北京大学は『校史』『校誌』『大事記』を何冊も出版したが、日本語コースについては過去の教師名さえ完全に記していない。中国を代表する日本語学者や外務官僚、さらに内閣大臣を輩出したこの日本語教育機関の歴史における重要性が認識されていないわけではなく、その背景には暗い一面があった。文化大革命中に陳信徳など当時の教師たちを反革命分子など事実無根の罪で死ぬまで追究した人々は、当時の若手教員や院生など学生であり、近年退職したばかりの機関責任者や代表的な教授であった。政権担当者の間違った政策と若者の特質ともいうべき衝動が合わさって生み出された過ちである。激動の時代を過ごした多くの人々が、自分に不都合な歴史は記録するのではなく、早く記憶から消し去りたいと思うのも無理からぬことであろう。マイナス遺産の苦

しみや悔いがいまでも人々の心を占めている証左である。こうした問題は、北京大学のみならず、殆どの大学に存在している。北京大学の日本語教育機関は 60 周年を迎えた 2006 年²⁹⁾、漸く「北京大学日語学科簡介」を作り、過去から現在まですべての教師名を公表した。

調査がもっとも難航したのは、中国人民解放軍外国語学院である。すでに軍の対外開放校に指定されたにもかかわらず、本文に述べたように、公式のホームページを作らず校内見学さえ拒否された。卒業生へのインタビューや、得た情報の考証や処理は極めて困難な状況である。また、インタビューに応じてくれた卒業生の氏名を公開できないこともそういった理由からである。

貧しさに耐え、投獄されたり家族を失ったりしながらも、激動の時代をくぐり抜けて生きた建国初頭の日本語習得者は、いま老いて歴史のなかに消え去ろうとしている。国家や思想に翻弄され、飲み込まれながら生きざるを得ない私たちに、彼らが語りかけるものとはなにか。これから各々の人物に追って研究していきたい。

さて、本発表、つまり 2 校への調査結果についてまとめてみよう。

まず、教師についてである。

教師陣から主に 3 つの特徴が見られる。第 1 にほぼ全員が日本で教育を受けたことがある。北京大学の徐祖正、魏敷訓、陳信徳、孫興凡、張京先、劉振瀛、黄啓助、東北軍区新聞学校の汪大捷、孫丹誠、趙福泉、北京対外貿易学院の陳涛、金鋒、張厚聡はそれである。第 2 に植民地で生まれ、日本語を身につけた者が多い。陳信徳、孫興凡、金鋒、汪大捷はそれである。第 3 に中国に残留していた日本人が少なくない。今西春秋、藤田恵美らはそれである。

次は、学生についてである。

学習者の特徴として取り上げられるのは次の 3 点である。1 点目は新入生の採用は成績より「家庭出身」が重視されたことである。2 点目は学生自ら進んで日本語教育機関への進学を選んだわけではなく、国から与えられた「任務」として日本語の学習を始めたことである。3 点目は卒業後の進路は自ら選ぶのではなく決められた職場に赴いたことである。

第 3 は、教材についてである。

主に 3 点の特徴が見られる。1 点目は、表で示したが、1950 年代には出版された教材が極めて少なく、3 校いずれも主にガリ版で刷った教材を用いたことである。2 点目は学生が自ら教材を編修し、または教材の編修に参加したことである。3 点目は日本語専攻より一般教養の日本語教科書は先に出版したことである。

追記：本研究は多くの先生のご支持を得た。とりわけインタビューに応じてくださった顧明耀氏と Y 氏は親身になって本研究を一層推進しようと協力して下さっている。中国全土に散っている 1950 年代の日本語教育事情に詳しい先生方に呼びかけ、来る 2009 年 9 月 13-14 日に新中国日本語教育史検討会を西安交通大学から場所の提供を受け開く運びとなった。この場を借りて両先生に感謝の意を表したい。

-
- 1) 全国高等学校招生委員会編 (1952) : 昇学指導, 全国高等学校招生委員会編印, p. 51, p. 22.
 - 2) 全国高等学校招生委員会編 (1953) : 1953年暑期高等学校招生昇学指導, 中国青年出版社, p. 130.
 - 3) 全国高等学校招生委員会編 (1954) : 1954年暑期高等学校招生昇学指導, 北京, 商務印書館, p. 173.
 - 4) 1955-60年は, 次の史料で確認した.
 - 中華人民共和国高等教育部編訂 (1955) : 1955年暑期高等学校招生昇学指導, 高等教育出版社, p. 226.
 - 中華人民共和国高等教育部編訂 (1956) : 1956年暑期高等学校招生昇学指導 (文, 史, 政法, 財經, 芸術部分), 高等教育出版社, p. 59.
 - 中華人民共和国高等教育部編訂 (1956) : 高等学校招生昇学指導 (專業介紹部分), 高等教育出版社, p. 183.
 - 中華人民共和国高等教育部編訂 (1958) : 高等学校招生昇学指導 (招生的学校, 系 [科], 專業名称部分), 高等教育出版社, p. 26.
 - 中華人民共和国教育部編訂 (1959) : 1959高等学校招生專業介紹, 高等教育出版社, p. 155.
 - 中華人民共和国教育部編訂 (1960) : 1960高等学校招生專業介紹, 高等教育出版社, p. 172.
 - 5) 1961-64年度は, 次の史料で確認した.
 - 中華人民共和国教育部編訂 (1961) : 1961高等学校招生專業介紹, 人民教育出版社, p. 168.
 - 中華人民共和国教育部編訂 (1962) : 1962高等学校招生專業介紹, 人民教育出版社, p. 165.
 - 中華人民共和国教育部編訂 (1963) : 1963高等学校招生專業介紹, 人民教育出版社, 北京第2次印刷, p. 154.
 - 中華人民共和国教育部編訂 (1964) : 1964高等学校招生專業介紹, 人民教育出版社, p. 160.
 - 6) 前掲, 1953年暑期高等学校招生昇学指導, p. 78.
 - 7) 前掲, 1953年暑期高等学校招生昇学指導, p. 78.
 - 8) 前掲, 1955年暑期高等学校招生昇学指導, p. 176.
 - 9) 2009年8月19日午後, Y氏の紹介で北京望京の李宗恵氏の自宅でインタビューを行った.
 - 10) 顧海根氏の証言によると, 1955年に入学し, 入学当時は4年制であった. しかし途中5年制に変更され, 1960年に卒業した. 顧氏は上海生まれ, 原籍は蘇州呉県. 言語学者, 主に中国人の日本語誤用例を研究. 1964年北京大学大学院を修了した後, 北京大学の教員となり, 以降1999年まで勤めた. 最初は「日本専門家」つまり日本人教師の通訳など世話人となり, 後に「聴力」「汎読」など授業を担当した. 元大連外国語学院日本語学部長陳岩氏の紹介で, 2009年8月16日午前, 中央党校にあるお嬢様の自宅で筆者のインタ

ビューに応じた。

- 11) 今西春秋と陳信徳を除き、ほかの教師については、主に当時の助手である孫宗光、学生である李宗恵氏と顧海根氏の回想によるもので、これから考察していく必要がある。
- 12) 平林美鶴 (1991) : 北京の嵐に生きる, 悠思社, p. 178.
- 13) 新文化運動時期に知られている知識者で, 1920年代すでに北京大学の教授となった。魯迅や郭沫若などと親交があり, 魯迅や郭沫若および竹下好の作品にも度々登場する人物である。例えば, 魯迅 (1927, 10, 8) : 反“漫談”(語絲第152期), 郭沫若 (1933) : 創造十年 (上海現代書局, 2版) がその一例である。また, 竹内好の年譜(「竹内好全集」第17巻所収, 筑摩書房, 1982) には, 「1934年7月19日, 徐祖正(北京大学教授, 作家, 日本文学研究家)の歓迎会への協力を頼まれ, 尽力を約す」と記している。徐祖正 (1927, 8) : 教育漫語(「語絲」第144-145期, 8月13日と8月20日連載), 島崎藤村著・徐祖正訳 (1927) : 新生 (合巻, 上海, 北新書局), 武者小路実篤著・王古魯・徐祖正訳 (1931) : 四人及其他 (南京書店) 等多くの論著を残した。また, 新中国北京大学日本語コースただ1人の教授である。
- 14) 孫宗光の回顧によると, 1936-1938年の間に北京大学を卒業。1951年から1952年に同コースの教員になった。
- 15) 前掲, 北京の嵐に生きる, pp. 150-172参照。
- 16) 黄啓助は, 北京中医学院編「日本語教科書第一学期用」, 「日語課本第三学期用1」の執筆者である。当時, これらの教科書はガリ版で刷ったものであった。1986年に黄啓助「日語(供中医, 針灸専用)」が上海科学技術出版社で出版された。
- 17) 岡崎兼吉先生治喪委員会 (1999, 9, 2) : 岡崎兼吉先生生平, 未公表。
- 18) 東北軍区新聞学校の歴史と関係ある中国人民解放军外国語学院(所在地は河南省洛陽市)と中国人民解放军信息工程大学(所在地は河南省鄭州市)はいずれも中国人民解放军総参謀部直属の教育機関である。2009年8月5日, 大雨。筆者は鄭州にある中国人民解放军信息工程大学を訪れたが, 大学の玄関で拒否された。こうした経験を踏まえ, 翌6日に洛陽に赴き, 友人の紹介で当大学附属図書館を訪問した。校史資料を保管する部屋は夏休みのため開放せず, 結局雑誌閲覧室と雑誌書庫しか見学できなかった。この学校および日本語教師は文化大革命前に日本語教科書を出版しておらず, 図書館の管理員によると, 文化大革命前に自ら編集しガリ版で刷った教材は, 何度もの移転によってほとんど処分された。
- 19) 汪大捷氏は軍事系日本語教育の創始者のみならず, 貿易系日本語教育の創始者でもある。最初に結婚した蘇敬和夫人との間に1人の息子がいる。元中国戯劇出版社の編輯蘇銘慈氏である。筆者は2009年8月18日に北京望京で蘇氏のお宅を訪問した。尊父汪の最期もここで過ごした。顔に優しい微笑みを絶えずたたえた蘇氏が, 父の激動の人生をゆっくり淡々と回想した。3時間予定のインタビューが6時間に及んだ。昼に帰ってきた奥さんが手作りの餃子をごちそうしてくれた。水餃子や焼餃子をたべながら, 奥さんにも義父への思い出を尋ねた。ご主人よりさらに義父への尊敬が深い心優しい中国の伝統的な母である。汪について, 「汪大捷と大同学園一戦前日本語習得者が考えた日中関係一」という仮題で単独的に研究を行う予定である。
- 20) 劉茂九氏は退役後, 故郷にある大連水産学院で日本語教授を務めた。筆者は2009年8月

に友人張玉蒼に依頼して本人と連絡を取り、また同月10日にご家族と連絡を取ったが、結局高齢のためインタビューは実現しなかった。先生のご健康を祈る。本研究はもう少し遅かったらまた多くの事実がうやむやにされるような気がする。

- 21) 校誌（再版）編委会：対外経済貿易大学校誌，未出版，2001年，40頁。
- 22) 前出，対外経済貿易大学校誌，36頁。
- 23) 前出，対外経済貿易大学校誌，755頁。
- 24) 前出，対外経済貿易大学校誌，41頁。
- 25) 前出，対外経済貿易大学校誌，761頁。
- 26) 前出，対外経済貿易大学校誌，762-765頁参照。
- 27) 全国高等学校招生委員会編：1953年暑期高等学校招生昇学指導，中国青年出版社，1953年7月，89頁。
- 28) 藤田恵美氏は顧明耀氏の先生である。顧氏のことは筆者が8年前に広島大学に外国人教授として来られた教育学者宋恩榮氏のご紹介で知った。氏は中日辞典や日中辞典など多数の辞典を編修した言語学者である。本研究は氏のご支持のもとでスタートした。4月から7月の間に3回にわたってお忙しい中時間を割いて下さり打ち合わせを行った。氏から藤田氏のご健在を教えられ、藤田氏の退職前の勤務先を通じて連絡を取った。その時の人事部の担当者にここで感謝の意を表す。2009年5月31日、顧氏と共に松戸市にある藤田氏のご自宅を訪問し、師弟両者への同時インタビューを実現した。80歳を越えた藤田氏は交通事故で療養中であり手足が不自由であるにもかかわらず、インタビューの申し入れを快く受け入れてくださっただけでなく、インタビュー当日はご自宅の最寄り駅に着いた私たちをお嬢さんが迎えに来てくださった。インタビューの後はお嬢さん夫婦を交えて昼食を御馳走になり、帰り際にはそば降る雨の中藤田氏はじめみなさんで駅まで送ってくださった。こうした藤田氏の温かいお気持ちとともに筆者の心に強く印象に残っているのは、氏が「自分の人生は時代が作りあげたものだ」とおっしゃって、その足跡が偉大であるにもかかわらず少しもそれをひけらかすところがなかったことである。個人情報や事実の立証などの原因で現段階ではインタビューの内容はすべて公開できない。
- 29) 創立年はいつから数えるのかについて様々な意見があるが、現段階では戦後の1946年からと考える意見が主流であり、2006年に成立60周年の記念祭事を行った。